**聖霊降臨節第４主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年６月９日**

**「慰めの共同体」**

**イザヤ書51章12～13節**

 **51:12 わたし、わたしこそ神、あなたたちを慰めるもの。なぜ、あなたは恐れるのか／死ぬべき人、草にも等しい人の子を。**

 **51:13 なぜ、あなたは自分の造り主を忘れ／天を広げ、地の基を据えられた主を忘れ／滅びに向かう者のように／苦痛を与える者の怒りを／常に恐れてやまないのか。苦痛を与える者の怒りはどこにあるのか。**

**使徒言行録15章22～35節**

 **15:22 そこで、使徒たちと長老たちは、教会全体と共に、自分たちの中から人を選んで、パウロやバルナバと一緒にアンティオキアに派遣することを決定した。選ばれたのは、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスで、兄弟たちの中で指導的な立場にいた人たちである。**

 **15:23 使徒たちは、次の手紙を彼らに託した。「使徒と長老たちが兄弟として、アンティオキアとシリア州とキリキア州に住む、異邦人の兄弟たちに挨拶いたします。**

 **15:24 聞くところによると、わたしたちのうちのある者がそちらへ行き、わたしたちから何の指示もないのに、いろいろなことを言って、あなたがたを騒がせ動揺させたとのことです。**

 **15:25 それで、人を選び、わたしたちの愛するバルナバとパウロとに同行させて、そちらに派遣することを、わたしたちは満場一致で決定しました。**

 **15:26 このバルナバとパウロは、わたしたちの主イエス・キリストの名のために身を献げている人たちです。**

 **15:27 それで、ユダとシラスを選んで派遣しますが、彼らは同じことを口頭でも説明するでしょう。**

 **15:28 聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。**

 **15:29 すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。健康を祈ります。」**

 **15:30 さて、彼ら一同は見送りを受けて出発し、アンティオキアに到着すると、信者全体を集めて手紙を手渡した。**

 **15:31 彼らはそれを読み、励ましに満ちた決定を知って喜んだ。**

 **15:32 ユダとシラスは預言する者でもあったので、いろいろと話をして兄弟たちを励まし力づけ、**

 **15:33 しばらくここに滞在した後、兄弟たちから送別の挨拶を受けて見送られ、自分たちを派遣した人々のところへ帰って行った。**

**15:35 しかし、パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって教え、他の多くの人と一緒に主の言葉の福音を告げ知らせた。**

**マザー・テレサはインドで貧しい中の最も貧しい人々に仕える働きをされました。マザー・テレサのことは皆さんよくご存じではないかと思います。彼女の働きの中でこのような話を聞いたことがあります。ある日、マザー・テレサは、8人もの子供がいる家族がその日の食べるお米がないと聞いて、その家にお米を持って行きました。子どもたちは明らかに栄養失調でした。お米を渡すと突然母親は家を出ていきました。しばらくして戻ってきた母親にどこに行っていたのかを聞くと、隣の家だと言いました。隣の家族もまたその日食べるものがないから半分分けて来たというのです。母親は自分の家族が充分に食べられないであろうわずかなお米を隣の家族と分かち合ったのです。**

**母親は自分の家族が食べられればそれでいいと考えるのではなくて、分かち合う喜びを知っていたのでしょう。だからこそ、恵みを分かち合って喜びを共にしたのです。そこには一つの恵みの共同体があるということができるのではないかと思います。**

**「割礼を受けなければ異邦人は救われない」そのように主張するユダヤ人たちがアンティオキア教会にやって来ました。パウロとバルナバは彼らと激しく対立して、埒が明かないためにエルサレム教会に行きこの問題をどうすれば解決できるかを委ねました。エルサレム教会でも割礼を求めるユダヤ人がいましたので、使徒たちと長老たちは共に主を見上げて主の御心を祈り求めました。ペトロは自らの経験からイエス様のただ恵みによって救われているのはユダヤ人も異邦人も同じであると主張し、ヤコブはこの意見に賛同して「神に立ち帰る異邦人を悩ませてはいけない」と言い、さらにはユダヤ人が避けている習慣を異邦人も避ける、ただこれだけを求めればいいのではないかと主張をしたのです。ユダヤ人も異邦人も共に主を礼拝し、共に食卓の交わりを持つことができるようにお互いがお互いに配慮しあう、それこそが教会の姿であり大切なことであると主の御心を祈り求める中で示されたのです。**

**そうして、使徒会議において決議された内容を手紙に書いてアンティオキア教会に届けることが決まりました。手紙の内容は23節から29節です。それはエルサレムの教会からアンティオキアとシリア州とキリキア州の異邦人の兄弟たちへ記されたの愛に満ちた手紙です。そしてそれを決めたのは私たち人間が話し合いで決めたのではなくて、28節にありますように「聖霊とわたしたち」が決めたことである。聖霊の導きのもとで決議されたことであることを強調するものです。**

**「15:28 聖霊とわたしたちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことに決めました。**

 **15:29 すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、みだらな行いとを避けることです。以上を慎めばよいのです。健康を祈ります。」**

**と結ばれています。エルサレム教会はこの手紙をアンティオキア教会に届けるのです。**

**興味深いのは、そもそも異邦人の救いの問題はアンティオキア教会のパウロとバルナバによってエルサレム教会に委ねられた問題です。ですから、単純に考えれば、パウロとバルナバにこの手紙を託してアンティオキア教会に届けてもらい皆で読んでもらえばそれでいいものです。そして、この決議事項を読んで慰められ力を与えられればそれでいいように思います。けれども、エルサレム教会はそうしなかった。わざわざ自分たちの中からバルサバと呼ばれるユダとシラスを遣わしてパウロとバルナバと一緒に行かせるのです。これって考えると不思議だなと思います。**

**なぜわざわざユダとシラスをエルサレム教会の代表としてパウロたちと一緒に行かせたのでしょうか。22節後半で聖書はユダとシラスをこう紹介しています。**

**「兄弟たちの中で指導的な立場にいた人たちである。」実は「指導的な立場にいた」と新共同訳聖書で訳されている言葉には「主な語り手」という意味があります。兄弟たちすなわちエルサレムの教会の主な語り手がユダとシラスなのです。ユダとシラスは12使徒ではありませんが、エルサレム教会の主な語り手として主に用いられていたのでしょう。そして彼らが何を語るかというと神の言葉を語るのです。主の十字架と復活の慰めの言葉を語るのです。そのような神の言葉、慰めの言葉を語る者、そのような聖霊に満たされた主な語り手であるユダとシラスをエルサレム教会はパウロたちと一緒に行かせるのです。それは明らかにただ手紙を託すだけでなく、神の言葉を慰めの言葉をアンティオキア教会で語らせるために、異邦人の救いの問題で意見が激しく対立し混乱してしまっているアンティオキア教会に主の慰めの言葉を語らせて主の慰めを与えるために彼らを手紙と一緒に遣わせたと考えられるのです。**

**パウロとバルナバとユダとシラスはこの手紙を持ってアンティオキア教会に到着しました。そして教会の人々に託された手紙を渡しました。彼らはその慰めに満ちた手紙を読んで慰められて励まされ喜びで満たされました。**

**でも、それだけで終わりではありません。ただ手紙を読ませて終わりではなく、ユダとシラスはエルサレム教会からの大切な使命を果たします。**

**「ユダとシラスは預言する者でもあったので、いろいろと話をして兄弟たちを励まし力づけ」（32節）預言者は神の言葉を語る者、慰めの言葉を語る者です。そんな彼らが色々と話をしたのは、決して世間話でなくエルサレム教会から託された主な語り手として神の言葉を語り、慰めの言葉を語ったのです。それは、神はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく愛して下さり、イエス様は全ての人の罪の贖いのために十字架に掛かって死んでくださり復活された、イエス様は全ての人の救い主である。そのイエス様の十字架と復活の罪の赦しを信じるだけで救われる。そしてそのイエス様は聖霊を通して今も私たちと共にいてくださる、その慰めを励ましを語り、混乱するアンティオキア教会を手紙だけでなく、語る言葉によって慰めて励まして力づけたのです。**

**彼らが語る言葉にアンティオキア教会の人々はどんなに慰められたことでしょう。ただ手紙を読むだけでなく、神の言葉を、慰めの言葉が目の前で語られる、それも一度だけでありません。しばらくの間共に時を過ごして、共に礼拝をしたのです。共に御言葉に聞き、祈る、イエス様を中心とした豊かな交わりが与えられたのです。**

**そうしてユダとシラスはアンティオキア教会の人々から送別の挨拶を受けて見送られます。「兄弟たちから送別の挨拶を受けて見送られ」は直訳すると「平和のうちに兄弟らから彼らを送った者らのところへ彼らは去った」です。送別の挨拶は平和の挨拶です。「主の平和があるように」とアンティオキア教会の人々はユダとシラスを送り出すのです。「主の平和があるように」「主が共にいてくださいますように」主の慰めを受けた教会の者たちが力づけられて立ち上がり、今度は慰めを与える者として彼らに慰めの言葉を与えて送り出すのです。こうしてアンティオキア教会は主の慰めに満ちた慰めの共同体として、互いに愛し合い、互いに励まし合い、恵みや喜びを分かち合う、そのような愛と恵みに溢れた慰めの共同体がここにあるのです。**

**教会では毎主日の礼拝ごとに神の言葉が語られます。それはイエス・キリストの十字架と復活によって私たちの罪が赦されて私たちが愛されて生かされている、そしてイエス様こそが私たちの真の慰め主であり、イエス様はいつも私たちと共にいてくださるという慰めの言葉が語られるのです。それはユダとシラスがアンティオキア教会で教会の兄弟姉妹に主の慰めを与えるために語られた慰めの言葉が語られたのと同じです。ただ手紙を渡して皆で読んでおいてではありません。聖書という神様からの愛の手紙だけが渡されて皆で読んでおいて自分たちで理解してというのではないのです。神様からの私たちへのそして教会への愛の手紙である聖書が礼拝で読まれて、聖書が語る主の慰めの言葉が説教という形で私たちに語られるのです。**

**その言葉によって私たちは主による慰めが与えられるのです。そしてその恵みを皆で分かち合うのです。決して自分一人だけのものにするのではなくて、皆で分かちあって共に歩んでいくのです。互いに愛し合い、互いに励まし合い、互いに祈り合って、恵みや喜びを分かち合うのです。そうすることで今度は私たちが主による慰めを与える者になることができるのです。主の平和を祈ることができるのです。「イエス様があなたを愛して下さり、どんなときにも共にいてくださいます」そのような慰めの言葉を私たちも人に与えることができるようになるのです。それが慰めの共同体である教会の姿なのです。主による慰めの言葉を宣べ伝えていきましょう。**